
RabiT × rabbit!!

志紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R a b b i T x r a b b i t ! !

【Nコード】

N 3 0 7 5 X

【作者名】

志紅

【あらすじ】

空からウサギが降ってきました、こういつ時ってどうしたらいいですか。“人の心”を冒すという、いわゆる地球外生命体…イルの駆除役として突然抜擢された主人公とウサギさんな宇宙人(?)の、笑いあり、葛藤ありのコメディチックなファンタジーアクションストーリー!!!

さあ一丁、正義の味方しましょうか!

#01 いつそ伏せ字使った方がいいんじゃないのと言ったら駄目なんです

地球のため、人々のため、宇宙のため、

今日もヒーローは戦う！

…ピッ

「あああああ！莉兔の馬鹿ああ！」

ひどいと泣き喚く弟を引き摺って、莉兔は玄関へと向かった。

その間にひよひよいと荷物を拾って、移動しながら準備も済ませてやる。

我ながらため息を吐きたくなるほどいい子だと、莉兔 向島莉兔は思った。

…けれど、今年大してめでたくもなく小学校二年生になった弟の雄飛はそう思っていないようで、バタバタと足を振り回して暴れる。

「仮面ハイヤーまだ終わってないのに！！鬼い、悪魔あ！！」

「はいはい、小学二年生にもなって未だに仮面ハイヤー見てるガキが何言ったって無駄だっつーの。がっこ遅れる、さ・っ・さ・と・行・け」

ポイ、と玄関から放り出して、ボタンとドアを閉める。ちゃっかり鍵まで掛けて、しばらく雄飛の莉兔を罵る声を聞いてから、部屋の中へと戻っていった。

…これが、確かにそのときまで、向島莉兔（16）の愉快的な日常だ

つ
た。

#02 この出会いは運命なんです

六時間目終了のチャイムを耳にしたのと同時に、莉兔は顔を上げた。

「じゃあ今日の授業はこれで終わりー。ノート写した人から帰っていいよー。」

ゆったりした教師の声に、やっと終わったと思いつつながらノートを閉じると、名前を呼ばれて返事を返す。

「…なに？」

「りいさ、今日暇？安達とかとゲーセン行くから、一緒行こうよ」

馴れ馴れしい呼び名にため息をついて、莉兔は手にしたペンケースで頭をパソコンと叩いた。

あと確定系で手を握ってくるのもとても鬱陶しい。

「りいつて呼ぶな。」

「それだけで叩かないでよ!？」

いったあ!と頭を押さえているが、知ったことか、自業自得と鼻を鳴らして立ち上がる。

「…はいはい、ごめんね、今日はちょっと用があるから、…また今度、な?」

にっこりと微笑むと、三上がみるみる頬を染めて顔を背けた。
それは反則でしょ…！とかなんとかぶつぶつ呟いているのに首を傾
げてから、鞆を手に歩き出す。

…放課後まで人に囲まれるなんてうざいだけだ。

歩く道すがら、感じる視線と掛けられる声に返事を返しながら、莉
兎はそう心の中で毒づいた。

「だる…」

下がってきた鞆を肩にかけ直して、小さく欠伸を漏らす。

そもそも帰宅部で、実際は用などない莉兎は図書館で七時近くまで勉強し、家路についていた。

暗い路地、時々ジジツ…と音をたてて点滅する街灯、その周りを飛ぶ羽虫。

なんだか酷く気だるい、とまた欠伸を噛み殺した。

「…あ、」

そういえばと空を見上げて、小学生の頃習った星を探す。

この季節なら、春の大三角形だろうか…と虚ろな目で視線を宙に漂わせて、

「……………ろ、……………か…と……………か？」

「…なんだ？」

微かに聞こえる声、それに目を細めれば、

「…なんか墜ちてきて…る？」

きつと、自分がつまらない日常に飽き飽きしていたから…。「」
を引き寄せたのだと、今でも莉兎は信じている。

「…あ…あ…」

「！？」

「あああああ…！」

「!?!?!?」

お決まりのような大きな音もたてずシユタツ、とかっこよく着地して、落ちてきたのはウサギのぬいぐるみだった。

真っ白い、普通よりもやや大きめなだけの、何の変哲もないぬいぐるみ。莉兔の腿のあたり、つまり大体80センチ程度のウサギで、ふわふわした白い毛に黒く大きな瞳、口は糸で×字型をしている。

…いや、認めよう。コレは、

「いったああああ!?!?足ジンジンするんだけど!!なあこれ絶対どつか折れてんだろ!?!無茶!超無茶!!なんでこんなことすんの!?!あいつやっぱり俺のこと嫌いだよ!!」

…ぬいぐるみなんかじゃ、ないです。

だってぬいぐるみは、まずこんなしつかり立たないし、喋らないし、だいいちこんなおっさん臭い喋り方はしない。…と、信じてる。

「…世間の常識はいつの間にかこんなもの許すようになったわけ？」

半ば呆然と、現実逃避の様に呟いた台詞。

自分もよく浮き世離れしてるだとか非常識なんて言われるけれど…これは非現実的過ぎてむしろこちらの正気を疑うレベルだ。

というか十中八九そうだろう。

なんだ、と知らぬ間に入っていたらしい力を抜く様にホッと息を吐いて、疲れてるんだ、さっさと帰って寝ようと踵を返した。

「…おい、」

否正しくは、返そうとした、だった。

背後から柄の悪そうなおっさん染みた声がして、勘弁してくれと言いたくなりながら…なぜか振り向く。

「…なあーに帰ろうとしてんだあ？あ？」

「…なんでぬいぐるみが喋ってんだ、」

「んなこたあ今はどうでもいいんだよ小僧、黙って聞けや」

そうやって仕草だけはやけにかわいらしく…擬音を付けるなら、うんしょうんしょといった風に、ウサギは尻尾（の辺り）から紙を取り出すと、

「…えー、向島莉兔殿、貴殿はこの 地区で最も“我々”の弊害と成りうる存在であると確認されたため、特殊ウイルス対策本部 支部特別対策員の任務着任を要請する、…と。」

「……………は？」

何かやりきった感じの顔をしているウサギには悪いが、莉兔には今言ったことの半分も理解できなかった。

「は…？何なのお前。は？は？は？」

「はっ、最近の若者はやっぱり礼儀がなってないな。年上に対して

何て口のききかただ。…いくら顔がよくとも、それじゃ将来女性には相手にもされない、だろう、よ！」

…年上なのかこのウサギ…。いやあのおっさん臭い喋り方で何となく納得だが。あと何か自分の顔にコンプレックスでもあるのだろうか。

どこか哀愁漂うウサギの様子にパニックだった脳内が少し落ち着く。そのままウサギをじっと見つめていると、

「…なんだよ、そんな哀れみの目で見るなあああ！…とにかく！ここはいつ人が通るかわからん！！我々の任務は至急で極秘なのだ、移動するぞ！」

「まあ、その意見には大いに賛成するけど…」

下手したらこっちが変態に見られかねないと、よつやく動くようになった足を家の方に踏み出そうとする。

けれど、

「ま、た、ですか…！」

足がまたしても動かない。この似非ウサギが何かしたのだろうと口端をひきつらせる。

ギギギ…と首を動かして…というか動かされ、下の方にいるウサギに視線を向けた。

「…っ 図々しい…！」

「ハン、俺だってお前みたいなのむさ苦しい男より可愛い女の子に抱っこされたいわ！いいから黙って連れてけ…！」

偉そうにこちらに向かって手を差し出してくる似非ウサギに…溜め息を吐きそうになりながら、仕方なく抱き上げた。

「なんでこんな事に…、」

なったんだ、という呟きは嘔み殺す。というか、信じたくないがよく分からない力で強制されているし、どうしようもないのだ。

「…あ、ちよつと止まれ」

「命令すんなクソウサギ」

「ああ…？てめ、何えらそっ」わざわざ運んでやってんのに今更なんなんだてめえ」…状況が変わったんだよ」

キャラじゃないと思いながらも、口が悪くなるのが止められない。

眉間にシワを寄せると、よほど凶悪な顔をしていたのか、周りを観

察するのを口実にするように、ウサギは莉兎から目を逸らした。

「…“臭い”が強いな…近い……………まあ、適性テストにはいい…か？」

「…なに、」

「おお、スピードが…うんまあ、俺も出来ればこんなのと組みたくないし……………」

「ウサギおまえ何言って」

「…決めた。…お前、」

いい加減イライラしてきた莉兎の言葉を遮るようにウサギが呟いたセリフと同時に、

『ヴォアアアアアアア！』

「…アレと戦え。」

今まで人生で聞いたこともない程のポリウムで奇声をあげながら
…緑色のよく分からない生物が近付いて来ていた。

「…は？」

呟いた言葉に既視感。

けれどそう言わずには居られなかった。

「意味わかんない、」

「うるせえなあ！説明は後でするっつんだよこの唐変木！！
いから、」

“ 走れ！”

そう聞こえた次の瞬間、莉兔の体は勝手に怪物に向けて走り出し
ていた。

…もちろんウサギは、またどこから出したのかボードに挟んだ紙を
手に、莉兔の腕からすり抜けていたが。

「ちよ、は、はあ！？」

むりやり体を動かされる感じが気持ち悪かった。しかも似非ウサギに。

「(…っなんなんだよ、)

」

止まれよ!と心の中で叫ぶと、

「…チツ、精神力は…合格、だな。…だけど、」

どうする?と背後で聞こえるウサギの声に、無性に誰かを絞め殺したい衝動に駆られた……なんて、考えてる場合ではない。

「…嘘だろ、なんなんだよ…もう…!」

走っていった先は怪物で、もちろん止まったのは、

『ウ、ガアアアア!』

「!?!?」

怪物の、目の前で。

目算だが五メートル弱はあろうかという、緑の怪物。動物園で見られるような生き物ではなくて、RPGの雑魚モンスター、のような。それでも一般人な莉兔からすれば、十分、むしろ十二分に脅威だ。初撃のパンチを呆然としつつもストレスでかわした莉兔は冷や汗をかいていた。

「瞬発力、合格…と。よし小僧、そのまましばらく逃げ回ってる。

」

「っは、あ！？ていうかエセお前さっきから…っわ！」

次の攻撃に転じてきた化け物の触手（？）を避けて舌打ちする。

けれど、ボコ…と音をたててコンクリートから抜けたそれにさすがに血の気が引いた。

「本気で避けないと…ヤバい、な」

静かに額の汗を拭う。

あんなの相手にどこまでできるか分からないが…多少自分でどうにかする努力はしてみるべきだろう。それでもスタミナには自信がある。

「よーい…スタート」

悪魔と毒づきたくなるような似非ウサギの声をバツクに、再び地を蹴った。

「はあ…」

『…ガガツ…首尾はどうデスか？』

「おいコラルーマてめえ、さっきはよくもあんな高さから落としてくれやがったな…！」

怪物…トラシルの頭突きを向島莉兔がひらりとかわす。

それにチツと舌打ちして、苛立ちのまま呟いた。

『ちよっとした冗談じゃないデスか、そんなに大声を出す体によくないですヨ？大体、今は“媒体”に入ってるんだから、別に平気でシヨウ？』

「そついう問題じゃねえええええ！」

『…ところで、確か“適合者”は意識的罪人の方でしたヨネ？』

どうデスか？と面白そうに尋ねてくるルーマの声に、話を変えるなと叫びたくなるのをぐっと耐える。

「どっ、って…」

『顔写真みたとたん破り捨てちゃうから、詳しい情報は知らなかったデシヨウ？』

「……それはお前が新発行してくれないからだろうが。」

壁のコンクリートがガラガラと崩れて山になっている。あれを片づけるのも俺の役目かと思うと涙が出そうだ。

『全く、向島くんが馬鹿みたいに美形だからッテ、勝手に嫉妬して職務放棄なんて最悪にも程がありマスヨ？』

「……っ男は顔じゃねえ！」

『いや意味わかんないですケド。』

「うるせえ！…とにかく、アレは…まあ、今丁度適性検査中だ、」

『いや知ってますケド。』

「…っ…精神力、瞬発力共に合格、今は持久力検査中で、後は…」

『 適正度とそれに伴う技術力ですネエ。 』

「 ……。」

『 まあまあ、そう暗くならないで下さいヨ？あなた程の実力者を活かさないのはキツイですから、適合度高そうな人選んだんですシ…
今度こそは、 』

「 ……るせえよ」

『 ありや、ご機嫌を損ねちゃいましたカネ？ まあいいか、それー
れじゃ、 』

いってらっしゃい。

「はあ…っ」

逃げ回り始めてどの位経ったのか、少し息が切れつつある。崩れた瓦礫の山からコンクリートを拾い投げつけて攻撃してみたりはしているけれど…

「こつも効果なしって、さすがにへこ、！？」

む、と発音しようとして、道路の凹みに足を取られる。とっさに崩したバランスを立て直そうとコンクリートに手をつけて、そこを軸に体を倒して攻撃をよけた後、バク転する。

「くっやっぱ無理だろ、こんなん…！」

騙し騙しでかわしてはいるけれど、やっぱりきついものがある。

「…あ…」

向かってくる怪物の触手に、思わず遠い目になった。走馬灯が過るほど思い出のある人生でなくて、特にこれといって感慨も後悔もないけれど。

「ま、しょうがない、よなあ…」

雄飛には悪いことをした、と…莉兔は静かに目を閉じた。

“ ……合格、だな”

「う、わ!?!」

キーン、と頭の中で金属的な音がして、さっきと同じように体が跳ね飛んだ。同時に聞こえた呆れ声に驚く。

「…エ、セ?」

「お前なあ、さっきからその“エセ”っての、なんだ?」

「いや、エセウサギのエセ。」

「何がエセだ! まあ本物じゃねえけど! ……たく…俺の名前は、」

『ギヤアアアアアア!』

「ハア…!」

ドガァン! という爆発音に、エセが…否、出たのは莉兔の口だ

溜め息を吐いた。向かって来た拳をかわそうとして…

「おい、エセ!?!」

「うるせえよ。だから俺は、」

静かに手のひらがかさされる。

「っおい!?!」

「連邦警察特殊ウイルス対策局第一支部、」

バン、と怪物の拳が、光を帯びた莉兔の手のひらに跳ね返される。莉兔はその声を呆然と、視界に揺れる黒いひげと共に見つめていた。

「ミコラルア・ベルマーレだっつうの。」

これは、こっちも名乗れということだろうか？

『…適合度も合格、だな。今日からお前は俺のパートナーだ。』

「…拒否権とか、」

『ねえよ。』

「はぁ……………向島莉兔、だ。」

『知ってるよ。』

「……………殴っていいか？」

『自爆したいならな。』

…そういえば

「なんなんだよ、この状況。」

視界には黒いひげがひくひくと揺れ、頭もなんとなく重い。信じたくないがこれは、

『ああ…今お前は愉快なウサギ人間だ。』

俺との適合でな、とゲラゲラ笑う声に、ぶちりと何かが切れる音がした気がした。

「殺す、殺すマジ殺す…！」

『だから、自爆だぞ、ってさっきも言ったし…。その殺意、今はアレに向ける』

「アレ…」

視線を向ければ、ガラガラとめり込んだコンクリートから起き上がり、こちらを睨み付ける怪物の姿。なんだか赤く発光している様な

のは、気のせいだと思いたい。

『雑魚だが…このままじゃあ死ぬぞ？さ、どうする？』

「…やればいいんだろ。」

さすがにまだ死にたくない小さく呟くとしたり笑いが脳裏に響いた。…死ぬ。

『じゃあまゝへはいはい！向島クン了承どーもデエス、自分は科学技術局局員のルマドラド…ルーマって呼んでくだサイ！』…つてつめえ…！』

突然脳内に別の声が割り込んで来て、更なる頭痛に顔をしかめる。その間にも緑…赤の怪物は近付きつつあった。

「ああ自己紹介はいいから、説明すんなら早く。」

《…ああ、そうですネエ。えっと、じゃあ向島クン、ちょっと耳に手を突っ込んでみてくだサイ。》

「…は？」

《あいや失礼、横の耳じゃなくて、上のうさ耳ですヨ》

「あ、ああ…『お、おいちよっとま』」

恐る恐る耳に手を入れる。その神経はどうやら莉兔には通じていないらしく、全く感覚がない。代わりにいてえ！ちよ、もっと優しく！と騒ぐアホウサギの声が聞こえるが、オール無視だ。

「…ん？」

《ああ、ありマシタ？…あ、トラシルがこっち来てマスね、…そのまま掴んで、取り敢えず振りかぶっちゃってください。》

「…りよーかい」

『…っいや、ちよ、』

『ギャアアアアアア！』

向かってくる赤い怪物　どうやらトラシルというらしい　に視線を合わせる。剣道なんてしたことはないが…なんとかなる、気がした。

「…うるせえつての」

『ガアアアアア！』

奇声を上げて長い爪を振り上げる怪物の顔が正面に迫って。ヒュッと空をきる音がした。

『《危ない！！》』

「…今だ、…ってか」

コンクリートを蹴って跳び上がり、怪物の顔面(?)を踏みつけて更に飛んだ。…さつきから思っていたが、やっぱり身体能力がはね上がっている。体が軽い。体力も回復しているし、これが“適合”なのだろうか。

「まあ、いいか。」

耳から抜いた柄を持ち、思い切り振りかぶった。その際悲鳴が聞こえたが：まあ、気にしない。

日常が壊れていく音がする。

けれどきつとこんな日常も、

「くっつまああ！」

悪くない。

m
i
s
s
i
o
n

0
2

c
o
m
p
l
e
t
e

章間 衝撃の事実なんです

「…で？」

ところ変わって我が家。

緑の怪物　トラシルを撃退した後、例のよく分からない力で強制的に家に連れて行かされ、ぬいぐるみを抱く振りをして自分の部屋に上がり今に至る。

「で、もなにもないっ、…っ、ま、り、この界限で一番人間を惑わす存在、それが、だららららら…お前だ！！おめでとうクソ野郎…ってことだよ」

フン、と偉そうにエセは小さな胸を張った。

意味が分からない。

「まっつったく説明になってない。」

溜め息をついて、どうやら質問の意味が分かってないエセからテレビに憑依したルーマに視線を移す。

画面いっぱいにはテナマークを浮かべて遊んでいたルーマを睨みつけると、なんだか照れたような赤を浮かべた。

ていつか凄いなそれどうやってんだ。何でもありか。

「いやン、向島クンみたいな美人サンに見詰められたら、ちよつとドキドキしちゃいマスヨ。」

「……………死んどく?」

ダメだ、こいつダメだ。科学者って言うから若干心配してたけど、マンガでよくいる頭は良いのに色々おかしい変態の人だ。

「向島クンに殺されるなら本もいやちよつと待つてくだサイなんですかその凶悪極まりない凶器、媒体だから死にはしなくてもちよつと痛いんデスヨ!？」

「そつかじゃあ遠慮なくヤれる…な?」

「何かタカナ変換していい感じにしようとしてるんでスカ、そんなのには騙されませ…だ、だま……………」

「…ちよつ、と、待つて、」

「ああ？何だよエセ、今からいいとこなのよ、」

「わぁミコサングツシヨブちょっとこの悪女どうにかしてください
」！

戸惑ったようなエセの声に 《あたし》は、テレビの画面に片足を掛けてアレを振りかぶった体制のまま振り向いた。

「お、前、」

女……？と、呟くエセの声に、ああやっぱり誤解していたかと頭を掻く。

「……………そうだけどっ、」

「は、はあああああ！？」

「ひるんてい。」

「いってえ！！」

ああああそんなばかなああああ！とつるさいエセから目を逸らし、溜め息をついた。

…ああさつきから溜め息ばかりだ。幸せが逃げる。

向島莉兔16歳ちなみに女、 ……なんだから、

「…前途多難？」

選択を間違ったかもしれません。

(あははははは！やっぱ気付いてなかったンデスね！！)
(てめえルーマ！気付いてたんなら言え！！)
(やあですヨ、こんなに面白いノニ。)
(このやるおおおお！)
(……はあ。)

章間 衝撃の事実なんです(後書き)

まさかの。

まあ王道っちゃ王道でしょうか。

いやいや 無理 ある だろ

というツッコミはなしの方向でお願いしますm(| |)m(笑)

本編での詳しい表記は恐らくありませんが、莉兔はかなりの美形でぱつと見美少年な中性的な人です。

あと、ルーマが莉兔のことを「向島クン」と呼んでいますが、それは上司が部下のことをクンと呼ぶような感じで、誤解してたわけではないです。

…まあそれは言わなくても伝わりますかね、

#03 現状説明なんです(前書き)

やっと莉兔の一人称を「あたし」で書けるようになりました…！
書きやすい…！！

タイトルは後々変わると思われます。

#03 現状説明なんです

「…じゃあとりあえず、一通りニコサンで遊んだ所で、」

「おいしいいむぎゆほ!？」

「詳しい説明した方がいいですヨネ？」

騒ぐエセの口を押さえつけ 正直これに効果があるのか若干不安だったけど 黙らせて、尋ねるルーマの声に頷いた。

…ほんとにどうやってているのか、テレビが首を傾げるように傾いているのは突っ込んだじゃいけないんだろっなあ。

「まあ、超常的なことに馴染みのない地球人にハ、にわかには信じがたいかもしれませんが」

「…地球人、か。」

そう、予想はしていたけれど。彼らはいわゆる、…宇宙人、というやつなんだろう。信じられるかと叫ぶには、ほんの一時間程でありえない現象を見過ぎてしまった。

やつぱりと溜め息を吐くと、ルーマが楽しそうに画面に音符を乱舞させていた。

「…それで、」

「そうですね、まずはきちんと自己紹介しましょうか？」

「…いやそれさっきもやったし、」

「…ッぷはあ、そういうことならまずは俺からだな!」

何回やる気だとうろんな目で思わずルーマにツッコむと、エセが拘束から抜け出してピヨンと飛び降りた。

どうでもいいけど見た目普通にぬいぐるみでウサギなのに扱いを雑にするのに躊躇しないのはなんでだろう。

「連邦警察特殊ウイルス対策局第一支部隊長、サラメア星出身のミコリア・ベルマーレだ！今年の抱負は地球の女の子にモテること！ミコ隊長と呼べー！」

「あーじゃあ自分もその流れで続けマスね？ええト、連邦警察専任科学技術局副局長、デラド星出身のルマドラド・ディオーン・オルガスタです。今年の抱負は…んー、AKのメンバー全員覚えることですカネ。ルーマと呼んでくだサイ！」

長い自己紹介が終わったところで溜め息を吐く。

「じゃあそろそろツツコンでいい？」

「ええどうぞ、」

「まず、まあ…君らが宇宙人っていうのはギリギリ理解した。で、連邦警察っていうのは？」

ことりと二人そろって首を傾げて、

「そうですね…平たく言うと、宇宙の平和を守る正義の味方？みたいナ？」

「…うさんくさっ！」

そして喋り方がうざい。

…じゃなくて、それは怪しくしか聞こえなかった。他の星 とい
うのもあるのは初めて知った。だと“超常的な”現象が常識みた
いな感じで語られていたけれど、もちろんあたしはあんな現象も、
連邦警察なんて物の存在も今の今まで知らなかった。パニックにな
るからと政府が隠しているというの、全くそれらしい人間が出て
こないところを見るとないだろう。ということは、恐らく地球は“

連邦”に加わっていない。

なのに何故、地球を守るかのような口振りなのか。takeなしにgiveがあるなど、有り得ないだろう。

頭を激しく回転させているせいで頭痛がしながらもそう説明すると、エセ…ミコが口を開いた。

「…それはもっともな疑問だけどな…何もなしに守ってるわけじゃないさ。」

「それを説明するには、まずさっきの化け物について話した方が良さそうデスネ。」

楽しそうに呟くルーマの声を聞いてはつとずる。

「そうだ、さっきの怪物…！トラシル、って言ってたけど、あれは？」

「trash ill、日本語、デシた力？それに訳すと屑イ
ル、デス。」

…無駄に発音いいな。

「…“イル”？」

「更に訳すなら、ええと…病魔、か？その屑、つまり低級、ってことだ。」

「さっき“特殊ウイルス対策局”って言いましたヨネ？その特殊ウイルスというのが…イルなんデス。」

「何かの病原体…では無さそうだったけど、」

その呟きに、ルーマが嬉しそうに頷いて画面に笑顔を浮かべた。

「そう、人の体を冒す…という点で分類すれば、イルは厳密にはウ
イルスではありマセン。」

「奴らが冒すのは、」

胡座をかいて床に座っていたミコが口を開く。ファンシーなウサギ
のぬいぐるみではどうにも深刻さは伝わらないが、声は真剣そのも
のだ。

「…生物の心…負の感情に支配された隙間に、奴らは寄生するん
だ。」

「心…負の、感情…。」

「うつ病で自殺、というニュース、この星では珍しくないデシヨ？」

「…まさか、」

「えエ、大半はイルの被害者デス。そうじゃない人間もいます
ケド。」

被害に遭っているのは、きっと地球人だけではない。乾いた笑い声
を零すルーマがどんな表情をしているのか、テレビ越しでは分かる
はずもなかった。

奴らは、と胡座をかいて腕を組んだミコが忌々しげに呟く。

「生物の負の感情を喰らい、喰らい尽くされた人間の心は消滅する。
その人間が自殺すんのは、イルが証拠を隠滅しようとするからだ。」

…他の星ですすでにその対策をとっていて、殆どの星に発症者は
いねえ。」

「だけど…この星の進歩は遅すぎるんです。」

…なるほど、話が見えてきた。

「だから…他の星にウィルスが広まらないように、連邦警察が地球でイルを倒してる…って訳か。」

「Yeah that's right!!..!」

「「!!?」「」

「うるっせえ!」

「ぎゃん!」

とととと走り寄ったミコに思い切り跳び蹴りを食わせられ、ルーマは悲痛な悲鳴を上げた。

…ネイティブな発音はいいけど、確かにさっきのはうるさかった。

「なにがイエーだ!うるせえよ!!その位でいちいち騒ぐな!」

「りっちゃんとの奇跡のファイリングにちよつと興奮しただけじゃないデスか!ミコさんのバイオレンスう!!..!」

怒鳴るミコにまるでアニメのように湯気を発して、ぶんぶん、と怒るマネをするルーマ。

「…きしょい」

あとりっちゃん言つな。

「ガビーン!」

「古い。」

さっきまでのシリアスマードは一体なんだったんだ、と溜め息を吐く。まあ暗いよりはいいけど。

「いやなんか、真面目な顔して話すのがめんどくさくなっちゃいまシて。」

「めんどいつて。」

「…もうお前早く帰れよ。」

「いやだミコさんってばナイスツンデレ！」

「混じりっけなしの本心だよ！」

「……………ところで、エ…ミコ、さっき“イルが証拠を隠滅しようとする”って言ったよな？」

「アレえりっちゃん気持ちいいまでのスルー！何という放置プレイ！！自分ゾクゾクしちゃうマスヨ！」

「ルーマお前…まあいいや、言ったが、それが？」

どん引いた目でルーマから数歩遠ざかり、こつちを振り向くミコ。
…うん、触れちゃいけないことってあるよ。

「ってことは…イルには知性がある、ってことか？」

その質問に嫌そうに顔を歪めて、ミコは吐き捨てるように言った。

「知性どころじゃねえ…体内に溜め込んだエネルギーが多ければ多いほど、奴らは明確な人格を持つんだよ。」

「人格…？」

「だから、厄介なんだ。」

呟き、頭を掻いて俯く。

「人間の心の間隙について…そいつの人格と少しずつ同化し唆して、
駆除に来る連邦警察を迎えうつちまうんだからな。」

「うわ…」

気分の悪くなる話にあたしは思わず眉をひそめた。それじゃまるで、
ウイルスじゃなくて犯罪者だ。

「まあ、だからって連邦警察が負けるかって言えばそんなことはね
えが…、厄介なのは確かだ。」

「大変だね…。」

普通の犯罪者の管理もあるだろうに。連邦警察の中に対策局がある
つばい感じだったから、それだけが仕事なわけでは無いのだろう。

「じゃあ、なんでわざわざあたしと、なんだっけ…適合？してイル
を駆除すんの？」

ミコの口振りだと他の星は地球よりずっと高度な文明を築いている
のだろう。ならそっちの技術や武器を用いた方が手っ取り早いだろ
うと説明すると、それに関しては自分の管轄ではないと首を振って、

…

「…あの、自分そろそろシカトも限界ナンですが…」

「「あ、」」

素で忘れてた。

「なんですカその、“あ、こいつ居たんだった…”みたいな目は！」

「よく分かったな…」

「せめて否定して…！」

きゃいきゃいと(?)しばらく二人でじゃれ合って満足したのか、ルーマがコホン、と咳払いをする。

「そうデスね…その辺の説明に関してハ、自分の担当デス。」
少し長くなりマスが、と前置きしてから続けた。

「他の星と比べて地球の発展がずっと遅れている、とは話しましたヨネ?それは地球が誕生してからたった年数ガ他の星より少ないということ何デス。星の環境というの八年の経過につれて変化するものデ、それに合わせて生物の体も変化シマス。つまり、地球の生育環境は他の星から見れば“古代”で…それに適した体を持つ生物は、地球以外にいないんです。」

「な、るほど…。」

中堅一般レベルの頭脳でしかないあたしが理解出来るギリギリの話だったが、とりあえず了解した、と頷いた。それにしても“古代”ってというのは…軽くシヨックだわ。

「…ま、そういう訳でな。適さないのは肉体だけで、精神に被害は

ねえ。だからああして、お前に宿って能力を強化したって訳だ。」

ふむふむ頷くミコにOK、と呟いてから話を仕切り直す。

「…で、あたしはこれからどうすればいい？」

首を傾げるとサラリと髪が揺れて、ああそろそろ切らないとな、とぼんやりそれを見詰めた。

疑問に思ったことは粗方聞き終わった。どうやら信じるしかなさそうだし、筋も通っている。じゃあ具体的に、あたしはこれからどうすればいいのか。

その言葉に少しだけ不思議そうに同じく首を傾げたミコが言った。

「意外だな…お前は面倒だと思っただけだ。」

「、、」
あたしの何を知ってるの、とあっさり呟きそうになった口をきゅつと閉じて微かに笑う。

「最近退屈してたから、かな…。楽しそうだしね。」

「…まあ、理由は何でもいいが…、最終確認だ。本当に、いいんだな？」

戦うのは平たく言えば“地球外生命体”。ただの人間であるあたしがそんなものと戦えば、もしかしたらただじゃ済まないかもしれない。事前調査でうちの事情も知っていると云うのなら、その辺のことも考慮してのことだろうか。

「…りっちゃん、ミコサンの力がいくら他より優れているとは言え、

」

「大丈夫。だいたい政府も通さない怪しい話に、拒否権があるなんて思ってたけど。」
それとりっちゃんは止めて、と口元を引きつらせると、小さなため息が聞こえて振り向く。

「それなら…交渉成立、だな。」

「…溜め息とか、」

ひどいと嘆くあたしの声を無視してミコは続けた。

「じゃあ… 契約を。」

「契約？」

「そう難しいものじゃない。…ルーマ、」

「アイアイサー、ミコサン！……ええっと、これ、デス、ね！」

割と大きな声で言ったルーマの…ええと、口？にあたるのか、画面からいやな音を出しながらズルツという感じに引つ張り出されたものを見て、あたしはげんなりと額に手を当てた。…後でリビングのテレビと取り替えよう。

「これは…、」

「まずこっちは、俺の本体の血液製剤みたいなもんだ。純粹に基礎的な身体能力も強化されるし、俺との適合で体にかかる負荷が少なくなるはずだ。」

そう言ってミコが指し示したのは、きらきらと光る液体っぽいものが中に詰められたカプセル。規則的に流れるように動く透明な液体はダイヤモンドを溶かしたようで、見とれる程に美しい。…血液製剤だと知らなければ。まさか血そのものではないだろうが…確かにどう見ても地球人とは身体構造が違っただろうな、と分かった。

「…それから、こっちが契約に必要なもんだ。」

「…十字架？」
きれいだ、と思わず眩くと、そうだろうと偉そうにミコが胸を張った。いやなんで？怪訝な顔をしていると、珍しくルーマが気を遣って補足してくれる。

「契約に必要なアイテムは、そのほとんどがミコサンの生まれ故郷でアル星で作られているんですよ。これも、その一つです。」

「へえ…。」

言って、改めてそれに目をやる。繊細でシンプルな造りの、けれど高級感漂う十字架のネックレスだ。…まあ標準より大きめサイズだが。ただの銀色とかではなくて、反射の角度によって色が変わり、中心に埋め込まれた透明な石が更に不思議な色合いで光っている。普通にアクセサリーみたいで気に入ったと思いつながらミコをちらりと見ると、何やらまたごそごそやり始めていた。そして取り出した黒い小瓶からポタリと中心の石に雫を一滴零して、満足げに頷く。

「よし、これでいいはず…と。じゃあ向島莉兎、」

お前の血をよこせ、と平然とこちらに向かって手を差し出したミコに、

「…やっぱり？」

契約といえはやはりそういうものかため息を吐いて、確かその辺にカッターがあったはずだと後ろを向いて探しながら、適当に声を掛けた。

「っていうか、いったい何のために契約なんですんだよ？…RPG

「じゃあるまいし。」

続けた言葉に yes！ video game！自分大好きです！と騒ぎ始めたルーマを黙殺して、ミコが首を傾げる。シカト慣れ早いな。あとAKとか地球…否日本文化に詳しすぎなルーマが怖い。

「いやどちらかと言うと…契約というよりは取引、だな。ただ書面だけの話になったら困るんで、物理的に拘束力のある儀式をするっただけだ。」

「…つまり？」

振り向き眉根にしわを寄せて尋ねると、ミコはこくりと頷いて十字架に手をかざした。

「…お前がこの話を他言しないよう、古代契約で拘束する。安心しろ、人に話さなきゃあ副作用はねえ。」

「…なるほどー、もう引き返せないってわけか。」
カッターを手にぼんやりと呟く。手のひらに当てて力を込めゆっくり引くと、プツリと赤い血が溢れ出た。

「そういう訳だ。…じゃあ行くぞ。」

自然と指が吸い寄せられるように動いて、手のひらを伝った血が石に落ちる。瞬間。

「っ！？」

目を覆いたくなるほどのダイヤモンドの光と強い風が石から吹き出して、あたしとミコを包んでいた。かざしていた手を石に当て何かぶつぶつ呟くミコを呆然と見つめていると、ルーマのあたしを呼ぶ

声がして振り向く。

「…りっちゃんりっちゃん、」

「…え、あ、何？」

「もうすぐミコサンの儀式準備が終わりますカラ、身構えててくださいね？」

何にと問う前に…“呼ばれた”気がして視線を戻せば、呪文のようなものを言い終えたミコと目が合う。真剣さに欠けた白いウサギの口が、ゆっくりと動いた。

「汝… 契約に同意するか？」

返す言葉は、言われずとも分かっている。

「あたし、向島莉兎は…ミコリア・ベラルーシとの契約に、同意します。」

言っつてそつと自分の手をミコの手の上に重ねる。ミコは一瞬ピクリと反応したが黙ってそのまま石を見詰め続けていた。そして次第に輝きが薄れ、それと同時に石から伸び始めたのはさっきの光をそのまま紡いだような光る糸で、あたしとミコの手をぐるぐると互いに結んでいく。ああ、赤い糸みたいでなかなか気持ち悪い、とか思いながらぼんやりと見つめていると、それは2人の手首を繋いで先20cm程残し宙に浮いた。

「…う、わ!?!」

不意に。その先端の片方があたしに向かってきて、どうしようもなく慌てふためくうちに 胸へと呑み込まれて、消える。…え？

「ちよ…、こんなことになるんなら先に言っというてよ。」

びつくりした、とまだ結構光を帯びた胸元が不思議で撫でながら文句をこぼすと、同じように光の糸を呑み込んだミコがしゃあねえだろ、と口を尖らせた(たぶん)。

「これを全部一々説明なんて出来るか。まあいい、これで俺とお前は正式にパートナーだ。」

確かに…と思い俯いて舌打ちしながらも、最後の言葉に顔を上げる。

「ですネ！コレでりっちゃんにいくら愚痴を語っちゃってもokな訳です！！」

「それは遠慮しとく。」

苦笑し楽しそうなルーマの提案をばっさり切っていると…なぜか二人がニヤリと笑って同時に口を開いた。いやな予感とまでは言われないけど、いい感じでは、ないな。

「…それじゃありっちゃん」

「これから、」

「よろしくな(デース)?」

「…よろしく。」

こうして、呆気なく終わった契約に唾然としている間にあたしは厄介事へと正式に足を踏み入れたのだった。

…ああワクワクしてきた。

(…あれ?)

ところでなんか聞き忘れた気がする、と…思ったけれど、なんだっ
たかか思い出せない。まあいいかと欠伸をして、あたしは一日を終
えた。

#03 現状説明なんです(後書き)

説明っ…終わりー!!

疲れた…画面が真っ黒でなかなか疲れました。そして穴があったらどうしようと思っぴびっている志紅です。

あ、あと、ルーマの出番はこれにて終了(笑)。一応サブレギュラーではありますが、#04の冒頭でちみっとしゃべ…るかなあ、程度で、今後は連邦本部にご帰還です。その理由についても本編にてそしてミコがかっこいいのはここまで。後はいじられ街道まっしぐら予定です。莉兔は段々キャラがおかしくなってきましたが、クールな方向で。

…まあそんな感じで、鈍足ですがよろしくお願いいたしますm()
ー)m

#04 暗い影と全ての始まりなんです(前書き)

ここからやっとな事態が動き始めます。長い間同じ所で停滞してましたからね…

あえて残してある疑問点も多々あるので、その辺も考えながら読んで頂けたら嬉しいなーと思います。

#04 暗い影と全ての始まりなんです

男は焦っていた。

じつくりと甚振って行く筈だったのに計画を狂わされるかもしれないことを、男は何よりも恐れ、理不尽に憤慨し、ひたすらに焦っていた。どうすべきだろう、と心の中で呟き… 不意に聞こえた声に反応してそちらに意識を向ける。そして…、

ああそうか、と静かに嗤う。

何も不利益だけではない、ならば出来る限り情報を引き出せばよいのだと…そう考えると不思議なくらい気分が高揚した。それに合わせ主人の心も浮き立つのがわかって男は声を上げて笑いだしたくなった。男は頭が良かった。何もかも上手くいく…これからのことを予測して計算し、そう言っただけで目を閉じる。

今更お前がどれだけ望もうともう逃げることなどできないと、暗い影は闇に溶けて消えた。

*

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3075x/>

RabiT x rabbit!!

2011年11月3日11時17分発行